古新聞更生事業・桜紙新生事業

虚虚実実実話櫻画報

第六巻

製作＝赤瀬川原平資本主義共和国

パジャマ放火男

【小田原】神奈川県小田原市の小田急線富水駅近くの住宅街で、二月末から今月初めにかけ、たて続けに発生した四件の放火事件の犯人が十三日夜、小田原署に捕まった。「妻と別れ、ムシャクシャしていた気持をまぎらわすため」と自供している。

放火犯人は小田原市堀之内三三七、店員、東村英之助(二七)。逮捕のきっかけは火事現場にかけつけた同署鑑識係が撮った写真の一コマから。放火事件のたびに市民の中にパジャマ姿の男が必ず写っているので不審に思い、十三日朝東村を参考人として取調べたところ、犯行を自供した。東村は放火する時は洋服だが、火をつけたあと急いで部屋に帰り、パジャマに着替え、寝床から飛起きてかけつけた——といった姿でカムフラージュしていた。

（48・3・14 毎日新聞より）

「刑務所で暮したくて」

広島の列車放火 工員が自供

【広島】さる八月二十九日、広島市松原町、国鉄広島駅の九番ホームに停車していた芸備線の普通列車が放火され、客貨車一両が全焼した事件を調べていた広島東署の捜査本部は四日午後五時、同県安芸郡矢野町生れ、住所不定、元工員川上光人(三)を放火の疑いで逮捕した。

三日夜、同駅構内の同署駅前派出所前を行ったり来たりしている川上を不審に思った同署清川良幸巡査長(三)が職務質問したところ、語すことがあいまいだったので、さらに追及すると「八月末の土曜日、列車に火をつけた」と自供したので、引続き取調べていた。川上は犯行の動機について「中学を卒業してから工場を転々としたがおもしろくなかった。刑務所に入ればただで食えるから」と自供、「自首して出ようと思ったがどうしてもできなかった」といっている。

（45・11・5 朝日新聞より）

妻が焼身自殺

夫に浮気したと疑われ

【宮崎】十五日午前九時ごろ、宮崎県児湯郡高鍋町の会社員Aさん(三)方で、Aさんがトイレに入っていたところ妻のB子さん(三)が『サヨウナラ』と声をかけたので、不審に思いトイレを飛び出し庭を見たところ、B子さんは十八㍑入りの灯油かんを頭からかぶってマッチで点火、全身火だるまになっていた。Aさんがあわてて火を消そうと水をかけたが、B子さんは全身やけどでまもなく死亡した。

高鍋署の調べでは、AさんがB子さんに『うわ気をしているだろう』と疑いをかけたため、十日ほど前から夫婦仲が悪かった。B子さんは便せんに『死んで身のあかしを立てます。いまでもあなたを愛しています』との遺書を残していた。

(48・3・15 西日本新聞より)

日比谷公園で焼身

若い自衛官が重体

二十一日午前六時すぎ、東京都千代田区日比谷公園内の桜門附近で、若い男が焼身自殺をはかって苦しんでいるのを、通行人が見つけ、丸の内署に届けた。

持っていた身分証明書から、この人は埼玉県戸田市笹目、航空自衛隊入間基地第三補給処所属の大山秀 二等空士(二)とわかり、世田谷区内の自衛隊中央病院に運んだが、全身やけどで重体。

同署の調べでは、大山さんは日比谷公園内の歩道に新聞紙を敷き頭から軽油をかぶってマッチで火をつけた。だが、炎に包まれて苦しくなり、燃えている衣類を全部自分ではぎ取り、約十㍍離れた水飲み場まで走って倒れたらしい。近くには軽油が半分ほどはいった十八㍑かんが置いてあった。

遺書はなかったが、大山さんは病院に運ばれる途中「おれは何をやっても中途半端でダメな男だ」と口ばしっており、同署は人生に絶望したものとみている。

(48・9・21 朝日新聞より)

自衛官一人が焼身自殺するときのエネルギーは七五〇ワットの電力に相当する。全国の自衛官が全員焼身自殺すると仮定して約十五万キロワット、日本全国の御家庭の電気が一時間半ともることになる。(？計算中！)

10歳の少年が放火

バー勤めの母恋しさ

【大分】十四日午後八時四十分ごろ、大分県大野郡三重町市場六区、ブリキ商吉川曼さん(六四)方の表通りに面した店のカーテンが燃えているのを通行人が見つけ、消し止めた。

三重署で原因を調べた結果、吉川さんの孫の少年A(一〇)=三重町立第一小四年=がマッチで火をつけたものとわかった。同署は十五日朝、Aを身柄付きで大分児童相談所に送り、試験観察処分にした。

Aの父親は数年前から大阪へ出かせぎに行っており、母親は同町のバーに勤めているため夜は一人になり、Aは「火をつけると母親が帰ってくると思い放火した」と言っている。

(48・12・16 中国新聞より)

無人派出所の中で マッチ四本燃やす

変な酔っぱらい男

東京・武蔵野署は十二日未明、無人の派出所に火をつけようとした練馬区関町一丁目会社員笹一隆(二二)を放火未遂の現行犯で逮捕した。

調べによると、笹一は同日午前零時四十分ごろ、武蔵野市吉祥寺東町二丁目の同署本田北派出所にはいり、なかのスチール製事務机の上に持っていたマッチ箱から四本を並べて火をつけた。巡視中の同署警ら一係志水和夫巡査部長(三〇)がたまたま現場を通りかかり「なぜこんなことをした」と聞くと、「いつもオレが帰るとき、この交番にはお巡りがいない。こんな交番はいらないじゃないか」と答えた。笹一は酔っており、志水巡査部長が派出所のなかに入れようとすると、げたをぬいであばれ、逃げようとしたので逮捕した。

(46・6・12 朝日新聞より)

馬25頭、街を"狂走"

きゅう舎2棟を焼く

六日午前一時すぎ、浦和市大谷口、土屋きゅう舎（土屋登さん経営）の木造一部二階建てきゅう舎兼住宅の二階居間付近から出火、同きゅう舎と隣の長谷川きゅう舎（長谷川甲子雄さん経営）の計二棟二百十七・五平方㍍を全焼した。この火事で両きゅう舎につながれていた競馬用の馬二十五頭が危険になったので、サクから放たれた。馬は火におびえて浦和市内や川口、越谷、蕨市などまわりの街なかを逃げまわり、警察官百人パトカー二十台が押えるために出動、深夜の大騒ぎとなった。約三時間かかって二十五頭全部を収容したが、四頭が自動車に衝突するなどの事故で重軽傷を負った。

土屋、長谷川両きゅう舎は国電浦和駅の南側約二㌔にあり、住宅地から百㍍ほどしか離れていない。カラカラ天気続きで乾ききっていたため、火の回りは早く、あっという間に燃えあがった。

火事に驚いた馬は狂ったようにてんでに走り出し、きゅう舎から約十五㌔も離れた越谷市までアシにものをいわせて走り回った。

（49・1・7 朝日新聞より）